

# 「満州国」及び旧植民地における高齢日 本語話者へのインタビュー (2)

—日本語・日本文化の記憶に関する報告—

奥 田 浩 司

1

「満州国」<sup>(1)</sup> 及び旧植民地における日本語・日本文化との接触の状況について考察することを目的として、高齢日本語話者へのインタビューを行ってきた。その内、本稿では、満州国で生活していた朝鮮人の日本語・日本文化との接触に関するインタビューについて報告を行う。

今回、インタビューに応じていただいたインフォーマントは、幼少時に植民地朝鮮から満州国に移住して小学校時代を過ごし、満州国崩壊後の中国において高等教育を受けた中国朝鮮族の朝鮮人知識人である。インフォーマントは日本語に堪能であり、インタビューのほとんどは日本語で行われた。インタビューを行ったのは、吉林省延辺朝鮮族自治州の延吉であり、2017年8月と2018年12月の2回に分けて行われた。

すでに「満州国」及び旧植民地における高齢日本語話者へのインタビュー(1)「日本語・日本文化の記憶に関する報告」<sup>(2)</sup> において、インタビューの内容について部分的に紹介した。本稿は、その続編にあたる。議論の性格上、前稿と同じ内容が含まれることを予めお断りしておきたい。

本稿では童話作家である、あまきみこの作品を射程に収める。あまは満州国を出自とし、あまん自身その点に強い拘りがある。加えて満州国での出来事を素材とする童話「雲」を書いており、後述するように「雲」は中学校国語教科書の教材となっている。

2

本節ではインタビューの一部について記述し、併せて注記を行う。記述の内容は、日本の敗戦前のものである。

—お生まれはいつでしょうか。

1932年生まれ。私は、朝鮮生まれです。1945年8月15日のときに、私は小学校6年生でした。中国では解放前と言いますが、小学校3年生のときに、(満州の)日本語学校にきました。延辺の、傑満洞小学校に入学し、5年生まで通いました。6年生のときに、引っ越して春陽というところに行きました。(満州)

(2)

は、執筆者が補足した)

上記の内容については前稿（注（2））でも記した。本稿では、高齢日本語話者が直接記述した出身地を追記し、注記しておきたい。高齢日本語話者は、以下のように生年月日と出身地の住所を書き記した。

1932年. 2. 23<sup>(3)</sup>

朝鮮咸鏡北道穩城郡永忠面永達洞

上記の住所について、朝鮮総督府編『朝鮮國勢調査速報 昭和十年 世帯及人口』で確認した点について報告する。<sup>(4)</sup> まず本書の性格について知るために、「凡例」の「一」「二」を引用する。<sup>(5)</sup>

- 一 本報告は昭和十年十月一日実地調査の結果各道知事、府尹、郡守及島司並特別地域の調査を委嘱したる諸官衛の長より提出したる道、府、郡島要計表及特別地域要計表に基き編纂したるものなり。
- 二 本報告は世帯及人口に関する速報にして申告書内容の精査の結果を俟たず作製したるものなるを以て、後日申告書其の他の調査書類を精査したる結果に比較し多少の相違を来すことあるを免かれず。

本書から、高齢日本語話者の出生地である「朝鮮咸鏡北道穩城郡永忠面永達洞」の「世帯及人口」の状況について確認することができる。以下の表<sup>(6)</sup>にあるように「咸鏡北道穩城郡」には六つの「面」があり、「永忠面」はその内の一つである。

府邑面名	世帯	人 口			昭和 五年 人口
		総数	男	女	
穩城郡	5, 728	30, 408	15, 515	14, 884	26, 842
穩城面	1, 130	5, 911	3, 063	2, 848	5, 633
柔浦面	2, 086	10, 280	5, 290	4, 990	4, 523
永瓦面	540	3, 263	1, 598	1, 665	3, 281
永忠面	487	2, 870	1, 426	1, 444	2, 767
美浦面	722	4, 314	2, 162	2, 152	5, 461
訓戒面	764	3, 771	1, 976	1, 795	5, 177

この表による限り、「永忠面」は人口2,870人の比較的規模の小さい集落であっ

たと思われる。

改めて言うまでもないことであるが、高齢日本語話者にとっての出生地は植民地朝鮮である。そのことは、記された住所が植民地朝鮮の行政区域であることから確認できる。「朝鮮咸鏡北道穩城郡永忠面永達洞」は、私たち日本人にとっては、過去の行政上の区域であり、多くの日本人の〈記憶〉からは消されてしまっている。しかし、高齢日本語話者には出生地として〈記憶〉され続け、現在に至っていることがわかる。

時代はやや遡ることになるが、「穩城郡」出身の人物の一人に呉成崙がいる。呉成崙については水野直樹「呉成崙 (オ・ソンユン)」<sup>(7)</sup> に詳しい。水野は次のように述べている。

呉成崙は、ニム・ウェールズ、キム・サン著『アリランの歌』に登場する人物で、朝鮮の民族解放運動史、共産主義運動史においてきわめて重要な役割を果たしたが、その経歴はあまり詳しく知られておらず、北朝鮮あるいは中国の歴史書ではほとんど無視されている。

呉成崙は、朝鮮の民族解放、共産主義運動に深く関与した活動家であった。しかし、水野によれば、呉成崙は日本軍に協力することになる。

太平洋戦争の期間、呉は満州国治安部顧問となって日本に協力したといわれる。日本軍は彼に「山本秀雄」という日本名を与え熱河省警務庁警尉補の職に就かせた。

水野は呉成崙の出生地、満州(問島)への移住について以下のように報告している。

一八九八年、咸鏡北道生れ。本籍は、咸鏡北道穩城郡永瓦面龍南洞二三一。一九〇六年、父とともに問島へ移住、幼年時代を和龍県月晴郷傑満洞で過ごしたというが、一九三〇年代の日本側資料では、住居を「吉林省琿春県首善郷一松亭」としている。(朝鮮総督府警務局『国外ニ於ケル容疑朝鮮人名簿』一九三四年、一三四頁)。

仮に、呉成崙の問島での居住地が「傑満洞」であるとすると、高齢日本語話者のものと一致する。推測に過ぎないが、「穩城郡」の朝鮮人の移住先が、同郷人の居る「傑満洞」に集中する傾向があったのではないだろうか。

ここで問島について、高崎宗司『中国朝鮮族』<sup>(8)</sup> から補足しておきたい。

(4)

鴨緑江の北岸と図們江（朝鮮では豆満江と呼ぶ）の北岸（それぞれ一九世紀後半、朝鮮人によって、西間島・間島と呼ばれるようになった）は、清国と朝鮮との封禁政策によって、長い間、一般の人々が立ち入ることのできない土地とされてきた。また、朝鮮との間の非武装中立地帯、いわば所属不明の地域であった。<sup>(9)</sup>

間島とは、朝鮮と清国の間の地域の名称であった。間島には1800年代から朝鮮人が移住するようになる。

間島は長い間、封禁地帯であったうえに、辺境に位置していたため未開発で、漢族や満族の人口も希薄であった。一〇年（奥田注：一九一〇）当時の漢族や満族の人口は三万人に過ぎなかったのである。そのために、朝鮮人は二万六千平方キロもの広い地域に集居地区（便宜的に朝鮮人人口が総人口の五〇％以上を占める地区をそう呼ぶ）を形成し、維持し続けることができたのである。間島（後の延辺）には、その後に朝鮮人の朝鮮人の自治地域が形成されうる客観的な条件があったと言えよう。<sup>(10)</sup>

高崎によれば1910年から25年にかけての「在間島朝鮮人人口が間島の総人口に占めた比重」は、70％以上であり、高い比率で推移している。<sup>(11)</sup> 間島は、満州国の成立により間島省となる。満州国時代にも、間島には多数の朝鮮人が移民として流入する。

どうして多数の朝鮮人が、間島及び満州国に移民として流入したのであろうか。高崎は「全時代を通して最大のプッシュ要因は生活難であった」とする。また、高崎は「プル要因としては、未墾地（可耕地）が多く、しかも、土地が朝鮮よりも豊穡であり、多くの作物の反当たり収穫量が朝鮮よりも多い、という情報が繰り返し流されたことを挙げることができる」<sup>(12)</sup> とする。いずれにしても、朝鮮人が生まれ育った土地を離れ、移民として異郷の地に移り住んだ最大の要因は生活のためであったことになるであろう。インタビューを行った高齢日本語話者も、そのような朝鮮人移民の一人であったと考えることができる。

とは言え、呉成崙の例にあるように、民族解放運動を目的に移民となった朝鮮人もいた。高崎は次のように述べている。

ところで、〇五年に朝鮮が保護国にされ、一〇年に併合されると、独立運動家の一部は、活動の場を中国東北に求めるようになった。当時の中国東北は日本の支配が及ばない外国であったうえに、たくさんの朝鮮人がすでに住んでいたし、朝鮮人の独立運動に同情的な漢族（中国人）や、朝鮮人ととも

に日本と戦う漢族もいたからである。<sup>(13)</sup>

間島から満州国へと変容する地域で、朝鮮独立運動は息づいていた。

この点にかかわり、引き続きインタビューについて考察していきたい。高齢日本語話者は以下のように発言している。

子どもの時に遊撃隊ですか。山で日本人と戦う。土匪と言いました。日本人の警察が、土匪を撃ちにいきます。

お父さんに聞きました。あの人たちはどうして山に行き、土匪になったか？ いたいあの人たちは何をしているのか？ お父さんはその時、民族心があったのでしょね。お父さんが言うところ、あれは実際には土匪ではない。朝鮮の独立のためにたたかっているのだ。これを、私は幼いときに聞いたことがあります。

お母さんに聞いたことがあります。遊撃隊に一人が参加した。あの家庭を日本人が軍隊を連れてきて、家を焼いてしまったし、人も焼いてしまった。

高齢日本語話者は、「土匪」についての〈記憶〉を語った。満州国の朝鮮人部落での親子の会話の〈記憶〉であるが、「土匪」をめぐるこのような会話は朝鮮人部落では珍しいことではなかったのではないだろうか。多くの朝鮮人たちは生活の場を求めて、満州国に移り住んだ。しかし、朝鮮独立のために戦う朝鮮人に対して敬意を払い理解を示していたと考えられる。その事が、高齢日本語話者の〈記憶〉から蘇ってくる。

「土匪」について、当時の日本の新聞記事を参照する。

【奉天廿七日発電通】 廿七日午後三時頃鉄路総局経営溝帮子、北鎮間乗合自動車が北鎮を距る二里の地点にて匪賊四十名に襲はれ乗客清水指揮官、吉原某外一名の三名の日本人及び満人十名を拉致し去つた満州国警察隊は直ちに出勤匪団を追撃すると共に日本軍の応援出動を求めた。<sup>(14)</sup>

高齢日本語話者の話にあったように、満州国の警察と日本軍が協力して「匪賊」に対抗していたことがわかる。次の記事からは、戦争と変わらない状況であったことが読み取れる。

【青島十四日発同盟】 わが討伐隊は去る九日馬回溝（掖県東北方廿四キロ）北方にて土匪四百を急襲交戦二時間にして西方に潰走せしめた、戦果次の如し

(6)

我方に収容せる敵死体六二、鹵獲品小銃三、同弾二〇八、手榴弾一八五、その他多数<sup>(15)</sup>

新聞記事を参照すると、高齢日本語話者の〈記憶〉を通して、満州国の言わば統治する側の語りと、統治される側の語りの相違が浮き上がってくる。統治側は「土匪」「匪賊」と名付け、「討伐」の対象として語る。それに対して、統治される側は、その対象を民族の独立のために戦う「遊撃隊」として捉え直している。

### 3

前節での議論を踏まえた上で、あまきみこの童話である「雲」について考察していきたい。なぜなら、この童話では満州国と匪賊が素材となっているからである。

この童話については、『あまきみこ ハンドブック』<sup>(16)</sup>に詳しい解説（三浦和尚）がある。それによると初出は『日本児童文学』（1968年9月）であり、2002年には中学校の国語教科書（『現代の国語1』、三省堂）に収録された。<sup>(17)</sup>

この童話には改稿の問題があり、木村巧「あまきみこの戦争児童文学—戦争体験の表象とその問題—」<sup>(18)</sup>で指摘されている。本稿では、この点に立ち入ることはせず、国語教科書に収録された「雲」に焦点を当て議論を行う。教科書は大きな影響力を備えたメディアであると言ってよい。そこに収録された作品において満州国と匪賊が表象され、多くの中学生がそれを読んだということは看過できない。

「雲」は、日本人と中国人の二人の少女、ユキとアイレンの友情の物語である。梗概は次のようになる。舞台となっているのは、日本人村と中国人村が隣接した地域である。ユキとアイレンは、仲良しであった。ある日、日本人村が匪賊に襲われ、日本人の村人は総出で匪賊に対抗する。日本の軍隊が応援に駆けつけ、かろうじて難を逃れる。日本の軍隊は、中国人村に便衣隊が紛れ込んでいるという理由から、村人を皆殺しにする。中国人を一箇所に集めて周囲に石油をまき、焼き殺すのである。それを目撃したユキは、アイレンを救おうと火の中に飛び込み、アイレンと共に死んでしまう。

語りは三人称客観視点であるが、日本人のユキに内的焦点化され、ユキの視点から見られた世界が描き出されている。作品世界の重要な場面の一つに、ユキが中国人の虐殺を目撃する場面がある。虐殺の光景は、次のように描き出されている。

「やつらの周りから石油をまけ。逃げる者は撃て。」

冷え冷えとしたよく通る声で、中隊長は命令した。山内さんがなにか言ったが、中隊長は振り向きもしなかった。

くぼ地の中の人たちはかたまり合うようになって、兵隊たちの動作をしいんと見つめていた。この世のすべての音が、大地に深く吸いこまれてしまったような時間が流れた。

草むらの陰のユキの顔は、血の気がなくなって青ざめていた。乾いた唇が、ひくひく震えている。ユキは、もう何も考えてはいなかった。ただ、いっばいに見開いたその目は、どんなことでも見逃すまいというようにきらきらと光っている。

「火をつけろ。」

ぼっというような音をたてて、炎は燃え上がった。

ユキは、まりのように飛び出していった。

「アイレン、逃げてえ。」

火に向かって走った。<sup>(19)</sup>

授業では、この時のユキの心情について、生徒に説明を求めることになるのではないだろうか。生徒は、ユキの心情を説明するために、ユキに寄り添い、ユキの「どんなことでも見逃すまい」という眼差しを通して惨状を知る。そして生徒は、満州国で起こった悲惨な出来事を理解しようとする。このような国語の学習は、生徒に過去の歴史への想像力を喚起させるであろう。

他方、この教材の特徴は歴史的事象を知識として身につけ、その上で想像力を働かせる作品になっていることにある。まず物語の始まりで「中国東北部に、日本が「満州国」という国をつくったばかりのころだった」<sup>(20)</sup>と、時代背景を明確に語っている。それに加えて、第二章では「匪賊」について次のように語られている。

匪賊というのは、そのほとんどは、日本人が自分たちの土地を安く取りあげ、勝手なことをするのに反対している便衣隊だった。便衣隊は、ふだんは普通のかっこうをして普通に暮らしているが、夜になると集まって、黒い風のように日本人の村や町を襲うといわれていた。<sup>(21)</sup>

この語りは、三人称客観視点となっている。言わばユキの視点からの語りを相対化するように、三人称客観視点から歴史的事象が語られている。そのことにより、読み手はユキの心情に寄り添うだけでなく、その遠景にある「満州国」の歴史にまで想像力の射程を延ばすことになる。言い換えれば、読み手は、ユキの目にしている惨劇は、ユキの帰属する「日本」が作り出したことに想い至ることになる。

このように考えるとき、改めて気づかされるのは、著者紹介に「満州（現在の

(8)

中国東北部)の生まれ」と記されていることである。この作品は、あまんの来歴と深く結びついていることが示唆されている。

三浦和尚は『学習指導書』に掲載された、あまんの発言を引用しつつ次のように指摘している。

当時の満州の人たちがどのような生活をしていたのかということ、おそらく中国人(アイレン)にとってはお米のおにぎりはごちそうだったこと(おにぎりはユキのアイレンに対する気持ちの象徴となっている)、日本を敵視する便衣隊の掃討のためには、関係のない中国の一般民衆を巻き添えにしても仕方がないという認識が軍にあったこと、それらは、日本に帰ってから自身で調べて初めて知ったことなのである。<sup>(22)</sup>

三浦の指摘にあるように、あまんは満州国から帰国後に資料を調査し、その知見をもとに「雲」を創作したのである。あまんの想像力は、歴史的事象との関わりを起点として、作品世界を創り上げている。「雲」がユキに内的焦点化しつつも、歴史的事象を取り込んでいることは、あまんの歴史的事象との関わりから理解することができるであろう。

最後に、朝鮮人の高齢日本語話者のインタビューに戻れば、私たちは、あまんの童話に高齢日本語話者と同じような物語を見いだすことができる。「雲」で語られている、「便衣隊」に関係して中国人が軍隊によって焼き殺されたという悲惨な出来事は、図らずも朝鮮人の記憶と重なっている。あまんの想像力は、当事者の〈記憶〉と響き合うようにして物語世界を創り上げていったのである。

朝鮮人の高齢日本語話者の〈記憶〉は、私たち日本人にとっては過去の物語ではない。「中国東北部に、日本が「満州国」という国をつくった」ことを、どのように考えるのかという問題と深く結びついている。

2002年に、「雲」は日本の中学校の国語教科書に教材として採られた。私たちの社会は、満州国での惨劇を広く共有することを目指していたのではないだろうか。三浦はつぎのように述べている。

教科書掲載は、折しも「戦争の加害責任」が問われた時期である。国語教科書に期待される「平和教材」として「雲」が掘り起こされたのは、そういう流れを抜きには考えられない。<sup>(23)</sup>

「戦争の加害責任」を問う時代が、私たちの社会にはあったのだ。国語教科書は、時代の思想を正しく受け止め「雲」を掲載した。そのことを、私たちの社会は記憶に止めるべきである。

## 注

- (1) 「満州国」には括弧を付して表記すべきであると考えますが、煩雑さを避けるため括弧は省略した。
- (2) 『愛知教育大学大学院国語研究』第27号、2019年3月
- (3) 1932年2月23日であるが、正確を期して、書かれたままと記した。
- (4) 本書は、朝鮮総督府によって行われた国勢調査の報告書である。奥付には「昭和十年十月二十日印刷」「昭和十年十月二十五日発行」とある。高齢日本語話者の生年は「1932年」（昭和7年）であるから、本書でおおよその状況は把握できるものとする。
- (5) 原則として旧字体については、新字体に改めた。
- (6) 前掲『朝鮮国勢調査速報 昭和十年 世帯及人口』、39頁
- (7) 『朝鮮民族運動誌研究』7号、1991年
- (8) 『中国朝鮮族 歴史・生活・文化・民族教育』、明石書店、1996年
- (9) 前掲『中国朝鮮族』、14頁
- (10) 前掲『中国朝鮮族』、18頁
- (11) 前掲『中国朝鮮族』、18頁
- (12) 前掲『中国朝鮮族』、21頁
- (13) 前掲『中国朝鮮族』、27頁
- (14) 「日満人十三名拉致される 溝帯子北嶺間で」（『読売新聞』1935年8月28日付）新聞記事からの引用に際して、原則として旧字体は新字体に改めた。
- (15) 「馬回溝土匪四百討伐」（『読売新聞』1944年7月15日付）
- (16) 編著者 あまんきみこ研究会（代表 宮川健郎）、三省堂、2019年
- (17) 収められたのは「資料編—ことばの生活を豊かに」である。以下、引用の頁数は、「資料編」の頁数による。
- (18) 『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』、2009年10月
- (19) 前掲『現代の国語1』、47-48頁
- (20) 前掲『現代の国語1』、32頁
- (21) 前掲『現代の国語1』、37頁
- (22) 前掲『あまんきみこ ハンドブック』、59頁
- (23) 前掲『あまんきみこ ハンドブック』、60頁

【付記】 本研究は JSPS17K02449 科研費の助成を受けたものである。

（おくだ・こうじ 本学教授）